

生涯におけるスポーツの在り方

The ideal method of sports in the life

1K04A0034-4

内山 祐貴

指導教員

主査 太田章先生

副査 磯繁雄先生

【緒言】

私はスポーツを「生きがい」とすることを推奨したい。なぜなら、スポーツは単に体を動かすということだけではなく、人との触れ合いによる心への影響や体力・食欲の増進といった身体への影響など、多くの可能性を秘めているからである。少子・高齢化が進む今日、子供から高齢者までスポーツを楽しめる環境が切実に求められるのである。

また、スポーツは健常者だけのものではない。障害者にとっても十分「生きがい」となりえるものである。ただ、障害者スポーツが我々健常者にとって身近なものとして浮かんでこないのは日常生活のなかで接する環境が整っていないことが要因となっている。障害者スポーツの発展のためだけではなく、わたしたちが暮らしてきける環境を確認するためにも障害者がスポーツに親しむ環境を作っていくことと、障害を持っていない人たちもそれに親しむ環境を作っていくことが重要なのである。

【第一章】

現在、日本人の運動不足化が進行している。最近話題になっているメタボリックシンドロームも食生活の変化と運動の機会の減少が引き金となっている。このようなスポーツ文化が一部にしか浸透していない社会では、健康に大きな影響を与えかねない。また、人間社会を生きていくうえで必要なコミュニケーション能力の不足も進行するだろう。したがって、運動をしようとする意識、運動をしたいと思うときにできる環境を普及させなければならない。

【第二章】

学校教育において運動部活動が衰退してしまっている。運動部活動の衰退は、子どもたちの運動不足、体力低下につながっている。また、体育授業で扱っている内容はスポーツ種目を楽しむことに終始している。確かにスポーツを楽しむことはできるかもしれないが、これでは生涯にわたってスポーツを楽しむ能力を育むことはできない。教員はスポーツ種目をプレイしている時間以外の学習の場を与えることを考えなければならない。

【第三章】

文科省や日体協などによって支えられている総合型地域スポーツクラブがもたらす影響は多い。第一に地域住民がスポーツに参加する機会が増えること、第二に人との触れ合いから生まれる精神的なもの、最後に、活動を通して地域住民の自主性・主体性が

高まることである。しかし、指導者不足や施設不足など、問題点は多い。

【第四章】

障害者の文化活動への参加は生活を豊かにするとともに、社会参加の促進として非常に有効であり、自立やノーマライゼーションに向けた観点から見ても、障害者の健康増進という点からも重要である。このことから障害者がスポーツにかかわる機会は健常者と平等にあるべきである。しかし、障害者が利用できる施設は完全に整えられているところは少なく、不便さを感じている利用者も少なくない。

【第五章】

日本パラリンピックキャラバン実行委員会が主催する体験授業は子どもたちの障害者スポーツに興味を持つきっかけとなり、好影響を与えている。また、関西学院大学で実施されている障害者スポーツ実技を受講している学生は、障害者スポーツを直接体験して様々な感想を述べている。多くは福祉に関する講義で受けた内容に比べ、実技により得られた感覚は鮮明のようである。

【第六章】

障害者スポーツを学校教育へ取り入れることによっていくつか効果が期待される。第一に生徒自身が持っている無限の可能性に気づく機会になる、第二に施設の改善、第三に障害者スポーツの発展という効果である。今回は中学校の総合的な学習の時間を利用した授業を提案する。

【第七章】

指導者不足や施設不足など問題点も多いが、総合型スポーツクラブが、今後の日本のスポーツ社会を担う存在になることは間違いない。また、障害者スポーツは我々健常者にとっても非常に有効なものであり、今後見直さなければならないことに気づいてほしい。私が示した課題や問題点が少しでも早く改善されることを願っている。

【おわりに】

文献やインターネットによる情報収集がほとんどであり、机上の空論とも言えるものとなってしまった。しかし、この論文の執筆を通して、まだまだスポーツは発展させることができるという感触をつかんだ。また、障害者スポーツを通して、人間の持っている可能性について私も考えさせられる機会になった。子供たちにもこの機会が与えられるようになったらよいと切に願う。